

今日も小さい蚯蚓が私の食事となった。

最近の奴らに関してはやたらと図体が小さいもの多くて困る。食事の満足度に関しては、私にとって質より量なわけである。勿論、そうとは考えていないものも多くいると思うが、他の奴らのことなんてどうでもいいし、見えたことすらないのだが。

うぞうぞと土を掘り進んでいく。別に行わずともいい行為なのであるが、しかし腹は減る。蚯蚓一匹程度では私の腹は満たされることはなく、新しい食事を探して暗闇の中を進むのであった。

「ソラ、というものを知っているか。」

少し前だったか。若者が私に対して問うてきたことがあった。

コミュニケーションというものをあまり取ってこなかった私だ。その時は何のことか全くわからないどころか、私に対して発言されたものだとすら思わなかった。

声が出た方へと返事をする。さて、知らないな。

新しい食べ物の名前か何かなのか、と投げたところ、声の主はいや、と返答する。

「どうやらどこかの場所の名前のようだ。俺も見たことはないが、そこには色々な食べ物が存在するらしい。蚯蚓なんかよりも、もっとすばらしいものもあちらこちらに沢山あるそうだ。」

まるで夢のような場所じゃないか。こんなところで毎日毎日同じものを必死になって探し、満足のいかない食事に我慢をしなくてもいいということか。

私はソラに興味を持った。何かに興味を持つということは生まれて初めての感覚であった。そして、いつか私も行ってみたいとすら思った。空腹に飢えることのない場所。なんという憧れだろう。そこは、とても明るい場所で、拘束感も閉塞感もない、とても自由な場所なんだと。

そんなことを思い返ししながら、何時間経っただろうか。先ほどの食事も随分と前に感じる。半日は過ぎたようにも思える。平衡感覚がどんどん狂ってきて、今自分は進んでいるのか戻っているのか、右に行っているのか左に行っているのかすらも曖昧になってきた。

さく、と、掘り進めた土壁が簡単に崩れ落ちて、別の道へと繋がった。どうやらここは既に誰かが空けた穴らしいやれやれ、穴を開けすぎてもはやどこがまだ行っていない場所なのかすらもわからなくなってきたようだ。

空腹は判断を鈍らせるのに最適である。腹が減りすぎて意識も朦朧としてきた。わけも分からず進んでいるのがわかる。正しい判断なのか、間違った判断なのか。

次第に目の前が明るくなってきた。もうだめか、頭までやられてしまったかと思った矢先に、掻いた手は空を切った。

「……？」

周りがとても明るい。

体温が急激に下がっていくのがわかる。

自分を閉じ込めていたものが、無い。

未だかつて味わったことのない感覚が一気に押し寄せてきた。

匂ったことのないニオイが鼻を衝く。

ここはどこだ？

もしかして、ここが、ソラ。

とうとうやってこれたのだ。思い焦がれていたソラに。

これで空腹になることもない。体験したことのない場所に来れたのだ。

と。

「——、——！！」

何かのうるさい音が耳を劈いた。それはどこどかと音を立てて私に近づいてくる。

ふいに、何かとても強い力で身体は宙に浮いた。

持ち上げられている、のか？

そのまま、突如として私は『落ちた』。

表現として合っているのだろうか。しかし、頭に強い衝撃を受けた。石に頭をぶつける何十倍もの衝撃で、私は意識と、ソラを手放した。

放り出されて叩きつけられた動かぬ四肢に、音が降る。

「こいつめ。やっと捕まえた。もう二度とうちの畑を荒らすんじゃないよ」